



学園花の村機関紙第

7号

TEL

2013年10月3日(木)

(0537) 24-0101

編集兼発行人 松井道夫

Fax 24-0242

掛川市掛川1065

〒434

mm317@tokai.or.jp

地べたからの視線

—軍隊は諸刃の剣—

津野 幸人

「元旦や一系の天子富士の山」という内藤鳴雪の俳句は、戦前の小学生にも広く知られていた。鳴雪の父は松山藩勘定奉行で、岩波文庫に収録されている自叙伝は、明治維新当時の士族の内情を探る上では興味深い。松山藩の百姓の子孫としての私の立場からすれば、どうしても容認できない部分もある。

松山藩は徳川幕府の親藩であるので、第二次長州征伐に際しては先陣を命ぜられた。戦端が開かれるや直ちに山口県の大島に上陸、守備兵の劣勢に乗じて民家からの略奪、婦女暴行をやつてのけた。やがて、長州藩の戦闘部隊に打ち負かされて、ほうほうの体で松山に逃げ帰った。鳴雪は、戦争のことだから少しぐらいの暴行は致し方ない、との意を自叙伝で述べているが、長州藩・大島の被害者にとってはたまったもの

ではない。戦争という非常事態を理由に、人間倫理を破棄して顧みない野蛮な思想がかつての日本の軍隊にも生き残っていた。

他の史書に拠れば、感動するのは長州藩の庶民に対する処置である。大島出兵には漁師が軍船の水夫として徴用されたのであるが、逃げ遅れて捕まった漁師に対しては暴行を加えることもなく、一人に二両という金を与えて松山市三津浜に送り返している。長州は道義の上でも勝者であった。松山藩主父子は朝敵に指名され、城下の寺に蟄居してひたすら恭順の意を表明した。極端な財政難にあった明治政府は、藩主父子の助命と引き換えに金十五万両の拠出を命じた。一口に十五万両といっても松山藩の財政収入の二年分である。藩は後日の返済を約束して、庄屋、富農層から金子を借り上げて政府に拠出した。その結果、藩主は助命され、県知事に任命された上に伯爵に叙せられたのである。維新により藩がなくなったのであるから、百姓への藩の借金はチャラとなったと聞く。

言論統制や戦争を経験しない若い世代の一部

は、簡単に「自分の国は自分の軍隊で守れ」と言つてのける。憲法によって兵役義務が若者に課せられた場合に、大義のない戦争への参加を若者が拒否できるであろうか。政府軍による自国民衆への武力行使の報道に接する度に、マックス・ヴェーバーが著書「職業としての政治」でいうように軍隊は、政治権力を維持するための暴力装置だと思ふ。デモに向かって発射される弾丸は決して他所事ではない、と危惧するのは若き日に特攻隊を志願した私の思いすごしであろうか。

仏教・天台の教義では、すべての人心には仏心も魔心も住んでいる(一念三千)という。歩みはのろいが人類は慈悲や愛を尊重する方向へ進化している。悪魔の知恵の産物である武器を人類に使用してはならない。何よりも大事なものは人類の理性を信頼することだ。現在の国家防衛は新機軸を迎えている。それは原子力発電所に砲弾なり旧式ミサイルが一発撃ち込まれた事態を想定すればおのずと自明であろう。国土は経済力と外交力を駆使して、平和的手段で守らなければならない時代となっている。インドを起源とする宗教の第一戒律は「不殺生」である。何故そうなのか、を常民の立場で省思してみよう。

「悠久を思い銀河を仰ぐべし」(高浜虚子)